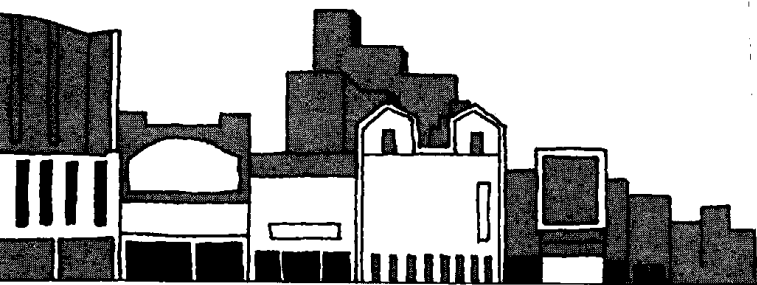


北杜夫全集——9



怪盗ジバコ
ぼくのおじさん

北杜夫全集—9



新潮社版

かいとう
怪盗ジバコ・ぼくのおじさん



〈北杜夫全集9〉

一九七六年二月二〇日 発行
一九七七年二月一五日 二刷

定価一〇〇〇円

著者 北きた 杜もり 夫お

発行者 佐藤 亮 一

発行所 株式会社 新潮 社

東京都新宿区矢来町七一(〒一六二)
電話 業務部 東京(〇三)二六六一五一
編集部 東京(〇三)二六六一五四
一 振替 東京 四一八〇八番

印刷 株式会社 光邦
製本 大口製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小
社通信保宛御送付下さい。送料小
社負担にてお取替えいたします。

目次

怪盗ジバコ	5
ぼくのおじさん	151
港にぎらつく日が	217
贅 沢	227
意地悪爺さん	233
童 女	239
買 物	247
大河小説	263
怪盗グレート	281
柳 の 下	289
初出と収録	302

怪盗ジバコ・ぼくのおじさん

怪盗ジバコ

目次

怪盗ジバコ	7
クイーン牢獄	22
猿のパイプ	37
女王のおしゃぶり	57
蚤男	76
トプカピ宮殿	93
007号出撃す	113
ジバコの恋	136

怪盜ジバコ

1

怪盜ジバコの名前に關しては、百を越える異説があるの
で、それをここに一々詳説することはできない。

本名はもとよりわからない。その出生は秘密の帳とほりにつつまれてゐる。一体もとは何国人であつたのか、どのような肌のいろをし、どのような目のいろをしているかも判明してゐない。彼は変相の名手だつたからである。

ともあれ、彼はサン・アルナウ伯と称してゐたこともある。アラ・ウド・デイン・キエルジの名を使つてゐたこともある。カルロ・ファネリ、ジョン・リン、ヤマシタ・ケントロウ、ジェームス・エイローなどという聞いたことのあるような名とか平凡な名、或いはアジヤ・ブジバ・タルタルローなどという妙な名前を持つてゐたこともあつた。

そのほか百の名に、渾名めだな、通称がゴマンとある。

わが国でも、各種の名で呼ばれてゐるが、ここ十年來——いま、この文が書かれてゐるのは一九××年だが——もつぱら怪盜ジバコと呼ばれてゐる。

それがどこから由來したかにも各説があるが、その一つによるところである。

當時、わが日本にある方面のたいそうな權威である學者がいた。どのくらいの權威かというのと、その方面の事柄については余人は一語も口をだすことができず、あまつさえ當の學者までひとことも口をきかないというほどの學者であつた。

彼は大學者であるから、むろんのこと奇人であり、変人であつた。その一つは彼がケチなことである。大學者である彼のものには、さまざまの文書が到來するが、毎日一通は、どこかの雑誌からのアンケートが來、また三通はなにかのパーティの通知がくる。アンケートは往復ハガキのことも多い。すると大學者はそれを切り離し、といつて返事を出すわけがなく、それを私信のときに使うのである。だから彼が出すハガキは、新しく購入したものではなく、「東京都千代田区内幸町二の二 日本放送協會 管理局文書部行」などと印刷してあるのがペンで消され、そのわきに目ざす宛名が書いてある。パーティの返事のハガキも、

決して出さず、みんなわが物にしてしまう。そのたびに彼はこう思うのだ。

「これで、五円もうけた」(当時、ハガキはまだ五円であった。)

アンケートが速達で、三十円の切手が貼られているときなどは、たいへんな御機嫌で、水に浮かして切手をはがし、みんな机の引出しにしまいこむ。

「これで、三十五円もうけた」

アンケートの返事を出せば、わるくいってタオル一本くらしいの返礼があるものだが、なにしろ大学者であるから、そこまでは考えが及ばないのであった。

この大学者が、あるときひとつ小説をよんでやろうと考えた。彼は若いころ——十六歳のころまでは小説めいたものをよんだことがあるが、以来一切そのような無益な作り話に手をふれたことがない。それがどういう心境の変化か、ふと近頃の小説というものを一冊だけよんでみようと思いたった。どうせよむのなら最上級のものをと考え、あたかもパステルナークの『ドクトル・ジバゴ』という本がノーベル賞をもらうとかいうことを家人に聞いたもので、「それだ、ドクトル・ジバゴ。なんとなく響きがいい」と呟いた。

それから近所の小さな書店へわざわざ自身で買いに出か

けた。本屋についてみると、いくらか背むしの、齒の黄いろい、うすぼけた老爺がただ一人店番をしていて、大学者の顔を見ると、いきなり、

「ドクトル・ジバゴですな」

といった。

「そうだ、ドクトル・ジバゴだ。しかし、わしの買いにくる本がどうしてわかったね？」

「どうしてって、みんなが買いにきまさあ。ドクトル・ジバゴは特売で、四割引きですからね」

「そうか、四割引きか」

大学者はニコニコし、老爺が棚から出してくれた本を見ると、なんだか薄っぺらで安っぽい本である。

「これがドクトル・ジバゴか」

「ドクトル・ジバゴでさあ」

「なるほど、そう印刷してある。するとわしが名を覚え違えたか」

定価もたいそう安かった。それを四割引きで買った大学者は大満悦で自宅へ引返し、さてソファに背をもたせてその本をひらいたのであるが、やがてその顔が妙に青くな

り、ついで赤くなり、ダラダラと涎までたらしはじめた。

有体にいうと、その内容は徹底した春本であったのだ。しかも、地球上に現存するどんなそれよりも、あからさま

で、どぎつく、煽情的で、もの凄いいものであった。その一部をでもここに引用できるといいのだが、今はその本は日本警視庁の某室の大金庫の中に「秘」という印をベタベタ押されて門外不出である。

ともあれ、その内容が、ろくすっぽ小説をよんだことさえない大学の心身に与えた影響は非常なものがある。彼は涎をたらし、そこらじゅうを這いまわり、うめき声をあげ、だしぬけに逆立ちしたりした。そのうち老妻におかしなふるまいをしようとして、したたか頬を叩かれ、雌の飼猫を追いかけてつんのめり、挙句の果てに、壁に掛けられたカレンダーの写真——そこには名勝の点景として、ほつんと小さく女性が写されていた——を抱いて、ふしぎなふるまいをなしたと伝えられるが、真偽のほどは定かではない。翌朝には、大学者の精神神経系統の動乱は元に戻した。のみならず、極めて立腹しはじめた。たちまち机に向うと、「ドクトル・ジバコを断罪す！」という激越な文章をかき、これを某新聞に投稿した。かかる破廉恥な、天をも地をも顧みざる、毒々しき醜悪なる小説が洛陽の紙価を高からしめ、ノーベル賞を受けるとはどういう罰当りの所業ぞや、という火をはくような一文である。彼は生れてはじめてその手紙を速達にし、机の引出しに大量に秘蔵してある三十円切手を三枚も貼ったと伝えられている。

この文章が発表されるや——大学者の文だから即座に載ったのだが——彼の立場は妙なものになってしまった。反論の投書が山積みされた。中には「題名さえもよみちがえている」というのもあった。困惑した大学者と新聞社の記者が、かの本を調べたところ、これが真赤なニセモノであることが判明した。さっそく警官同道でくだんの本屋に駆けつけてみると、老爺はいず、小首をかしげたおかみさんが、「そういえば、一度、そのような年寄りから道楽に店番をしたいからといって、お金をもらったことがある」とこたえた。

この事件は、実に曖昧モコとしているのであるが、世間の評判によると、おおむね次のように決まった。これこそかの怪盗——そのころまでわが国では彼は怪盗ドドンバと呼ばれていた——のしわざである。怪盗は、わざわざ「ドクトル・ジバコ」なる本を印刷し、自身であるか手下であるかはわからぬが本屋に手をまわし、高名なる大学者をかかったのである。

ここで首をかしげねばならぬのは、一体大学者が「ドクトル・ジバコ」なる本をよもうと思いたったのをどうして探知したか、たとえ探知できてもその時間にインチキ本を印刷できたか、などの疑問である。しかし、世にマカ不思議なことがあれば、それはかの怪盗のしわざであると断定

する風潮が、とうに世間には広まっていたのである。

なにしろ怪盗には不可能の文字がなかった。どんな大金庫でも赤子の手をねじるようにこじあけられた。こじあける？ いや、怪盗が「ひらけジバコ！」と呪文を唱えると、どんな超合金の扉も暗号鍵の効もなくひらりとあく、と信ぜねばならぬ痕跡があった。

そのころから、怪盗は「怪盗ジバコ」と呼ばれだし、この名称は海をこえてかなりの普及力を有していたから、この文中でもその名を使用させて頂く。

怪盗ジバコは、過去に於て、一国の国家予算をこえる盗みを働いた。大きな犯罪を列記してゆけば、その中の六割は彼に関係すると言われた。しかも、あらゆる国に於てである。世人に好奇の目をむきださせた英国の列車強盗にしろ、ニューヨーク博覧会の「暁の夜光虫」とよばれるダイヤモンドの盗難にしろ、いずれはジバコが裏であやつっているにちがいないと、大衆は信じた。

ギリシャの新聞にその名が報じられると思うと、次の日には台湾に出現した。途方もない南海の孤島でヤシの実を十箇盗ったと思うと、共産圏から金の延棒を運びだした。彼の手下は、あらゆる人種を含めて、千人ともいわれ、一万名ともいわれる。

怪盗ジバコの特徴は、正体が絶対にわからないことであ

る。彼は何国人にも化けられる。四十八を越える国語を自由にあやつるばかりでなく、大きな国のそれは方言まで意のままである。日本に於ては、東北弁、大阪弁、熊本弁を——もとより標準語はアナウンサーより明快である——巧みに使用したという報告がある。沖繩では宮古島の方言をしゃべり、本島人の年寄りとは会話が楽でなかった、とも伝えられている。過去、彼は八十六回逮捕されたと報告されたが、そのいずれもが別人であった。

ちかごろでは、警察も半ばあきらめて、ジバコと思われ
る男を逮捕しても、

「おまえは怪盗ジバコか？」

「残念でした。エヘヘ」

といわれると、「又か」というように肩をすくめて、そのまま釈放する始末である。

年齢もまったくわからない。三十になるかならぬかの若造だと主張する警部もいれば、いや、あれは影武者で、本人は足腰立たぬ老人だと言いはる記者もいる。その変相術は腫孔のいから骨格まで変えてしまおうし、フランケンシュタインのような異形の者から、絶えいるような美女にまで姿を変えられるらしい。

また彼は飛行機の操縦から、ダイコンおろしのすり方、あらゆるスポーツに秀でている。格闘をやらせたらジェー

ムズ・ボンドでも危いだろうとのもっぱらの評判だ。要するに、彼は超人なのである。

その超人ぶりにものをいわせ、ジバコは過去に於て、史上最大、最悪の盗みを働いた。彼によってつぶされた銀行は百三十八、彼によって総辞職した内閣は三つ、彼によって更迭せしめられた警視総監はその数を知らぬ。

しかし、怪盗ジバコが途方もない金持になるにつれ、その盗みにはあこぎなところがなくなつた。極めて余裕のある、むしろユーモアのあるものに化してきた。世間では、彼が金の捨場に困り、冗談で盗みを働いているのだ、と真顔で主張する人もいる。ときどき彼は、一万ドルを盗むのに、あきらかに十萬ドルをかける、というやり口がほの見えるのだ。

この間も英国の片田舎の質屋へ盗みに入るのに、わざわざ地下道を掘り、とどのつまりは飼猫の食物を入れる小皿を一枚盗つていった。その皿が実はたいそうの骨董品なのではないかという警察の質問に対し、おやしはおろおろと言つた。

「あれは絶対六ペンス以上の価値はありませんので。スパー・マーケットで買ったばかりの品物で、へい」

なぜ怪盗ジバコのしわざであるかわかるかというところ、彼は盗みの現場に一枚のカードを残してゆくからである。

そのカードには、

「無礼ながら盗みに入り申し候」

と、十何カ国語で記してあり、その下に世界各国で使われている彼の通称がおよそ五十ばかり印刷してあつた。

このカードは金ぶちの、古代の王家の紋のごときすかしのはいっている上質の紙で、なかなか偽造もできなかった。従つてコレクターの間ではたいへんな高値を呼んでいて、怪盗ジバコに盗みに入られても、ちよつとした金額だとむしろ得になるといふのが実状であつた。

言うまでもなく、怪盗ジバコは各国の大衆の間で、隠然たる人気を有していた。オランダの女学校での人気投票で、女王が辛うじてジバコを二票凌駕した、というのが実状である。

従つて、世界各国人は、怪盗ジバコが自分の国の人間であると主張してゆずらなかつた。アメリカ人にいわせると、ああいふ世界一のことをやるのはもちろんアメリカ人さ、ということであり、フランス人は、もちろんあんなエスプリのある仕事はフランス人に特有のものである、と言つた。

わが国に於ても、怪盗ジバコは実は日本人であるという説が、ヨシツネとジギスカンを結びつけるよりもずっと強力に信ぜられた。現に『怪盗ジバコの秘密』という新書判の本はベスト・セラーとなつたが、その中ではジバコは

私生児として大正八年に北海道の利尻島で生れていること
になっている。

2

とある東京の下町の夕ぐれどき。

そこは地面の湿った露地で、人通りはほとんどなかった。
ときどき、洗面器をかかえて風呂へ急ぐ男女の姿が見られ
るばかりである。

電車通りの方角から、一人の六歳くらいの男の子が、う
つむきがちにとほとほとやってきた。ほころびかけたセー
ターに半ズボン、ちびた下駄を突っかけている。

近づいてきたのを見ると、その丸顔の顔が、なにかを懸
命に堪えるようにゆがんでいる。そのまま十歩ばかり、つ
まずきながら歩く。と、その小さな体は、急に電柱にむか
って走りだし、そのかげでしくしく泣きはじめた。これは
人間というものがいかに弱い存在であるかを証している。
男の子が泣いたということより、電柱を求めたということ
がある。大体、人間というものは、オシッコをするとき
も電柱を求める。自分はそうでないと信じる人でも、な
んにもない原っぱの真中でオシッコをするとき、得もいえ
ぬ頼りなさや空白感を覚えるだろう。

スエズ運河のサウジアラビア側は、文字どおり一木一草
とてない、荒涼とした砂漠である。ただ、ある箇所に、自
動車道路——本当は道路ではなく、その辺りを自動車が行
きるといふことだけである——に沿って、ひとむらの灌木
がある。この灌木のそばを通りかかると、どの自動車も必
ずとまり、男どもがおりてゆき、灌木にむかってオシッコ
をする。オシッコのせいで灌木はとうに枯れてしまってい
る。だが、のべつぎらぎらと太陽のかがやく砂漠にあって
は、オアシスと同じく、枯れた臭気のある灌木とて重要な
存在なのである。

話がわきにそれたが、ともあれ男の子は、電柱のかげで
シクシク泣いていた。涙にぼやけた視野に、おぼろな地面
が映っている。自分の影が、道の反対側にある街燈の光を
うけて、斜めに横たわっている。

と、その小さな影のわきに、もう一つの大入道のような
黒いうえにもかぐろい影が、ニユッと突きでてきた。

男の子は、ビクッとして、涙で一杯の目をあげる。

黒地のドスキンの背広を着た、背の高い紳士が、こちら
を覗きこんでいた。

「坊や、どうしたね？」

と、その紳士が言った。

そう尋ねられると、男の子はまたひとしきりしゃくりあ

げた。それから、かほそい、とぎれとぎれの声で言った。

「お菓子屋が……インチキ……したんだい」

「なんだって？ お菓子屋が？」

「うん、あそここの角の店なの。とつてもひどいおじさんがいるんだい」

「なんだって？ ゆっくり説明してごらん」

男の子は言った。

「ほく、風船ガムを買おうとした」

「うむ」

「風船ガムを一つとつて、十円出した」

「ふむ、ふむ」

「だけど、おつりをくれなかった」

「風船ガムというのはいくらなんだね？」

と、紳士がゆっくり訊いた。

「五円」

「すると、五円のおつりだね」

「でも」

と、男の子は口惜しそうに唇を噛みしめた。

「あのおじさんはくれなかった」

「どうして？」

「ぼくが、はじめから、五円しか出さないといいんだ」

「そりゃけしからんな。しかし、十円と五円じゃ、間違え

る筈ないだらう？」

「でも、そのとき客が何人もいたんだ。おじさんはジャラジャラ手に一杯お金をもつた。そんなから五円を見せて、ほれ、おまえの出したのはこいつだよ、って言った」

「五円損したわけか」

「そんだけじゃないよ」

と、男の子は唇をふるわせた。

「おじさんは、こうも言った。おまえが十円出す筈がないじゃないか、おまえはいつも五円なんだ、って。たしかにぼくはいつも五円もつて風船ガムを買いにゆく。でも、今日は十円だったんだよ。ちゃんと十円もつてたんだよ、それなのに……」

またもや、男の子の両眼に涙があふれそうになる。

「そうか、よしよし」

と、紳士は男の子の肩を叩いた。

「だが、君はそんなに風船ガムが好きなのかね？」

「だって、ぼくには風船ガムしかないんだよ。お父さんは死んじゃったし、お母さんはかまってくれないし……。風船ガムだけがぼくの生き甲斐なんだよ」

と、男の子はこまっちょく来て言つて、涙をすすりあげた。

「そうか、よしよし。可哀そうにな。うむ……よし、こう

しよう。あしたお昼ごろ、ここに来られるかい？」

男の子はうなずいた。

「よろしい。おじさんがここで待っていてあげる。そして君に、ちょっとしたプレゼントをあげよう」

男の子は、こつくりとうなずいた。

それから目をあげてみると、黒服を着た紳士の姿はいつの間にか、かき消すように見えなくなっていた。

——その翌日の午さひるごころがり、くだんの駄菓子屋の前でのことである。

駄菓子屋のおやじが店先に出てみると、その角に、一台のマイクロバスがとまるところであった。

「ふん、あんなところにとめやがって。目ざわりつたらありやしない。この通日も駐車禁止にすべきだ」

と、おやじは思ったが、もし彼が車を所有したとしたなら、その逆の観念を抱くことであろう。

と、見ているうちに、マイクロバスからぞろぞろと、およそ二十名に余る人数が降りてきた。

「ふん、修学旅行じゃあるまいし。一体なんの真似だ？」

と、おやじは思ったが、なお見ていると、大きなカメラが二台、三脚についたままかつきだされてきた。なおレフレクターやら、組立椅子やら、こまごまとした付属物がかつきだされてきた。

しかも、一番あとから、たいそう楚々とした二十歳くらいの美女が二人、足元を気にしながらおりてきた。

「ふーむ、こりゃ映画のロケかも知れないぞ」

と、おやじが思っているうちに、若い男が道に繩をはり、交通遮断をしてしまった。早くも、その繩の外に、弥次馬たちが集まりはじめた。

たちまちのうちにカメラがすえられ、そのうちの一台はびたりと彼の店の正面をのぞく恰好になった。

「ウヒヤ、ウヒヤ」

と、おやじは思った。

「これはどうしたことだ。おれの店を背景にするつもりかな。それにしても女優をこうしてなまで見るのは初めてだ。やはり綺麗なもんだな。どうだい、あの足は。もっと近くへ来んかな」

すると、一人の女優が近づいてきて、それこそ彼の真ん前へ、一メートルとへだてられない地点で、ルージューを使いだした。

「ウヒヤ、ウヒヤ」

と、おやじは思った。

「これはおどろきだ。十メートル離れるとあんなにきれいに見えたのが、こうそばに来られると、ドールンとつけ睫毛まつげのオバケだな。いや、女は化けるものだ。といって、